



くにし・よしひこ



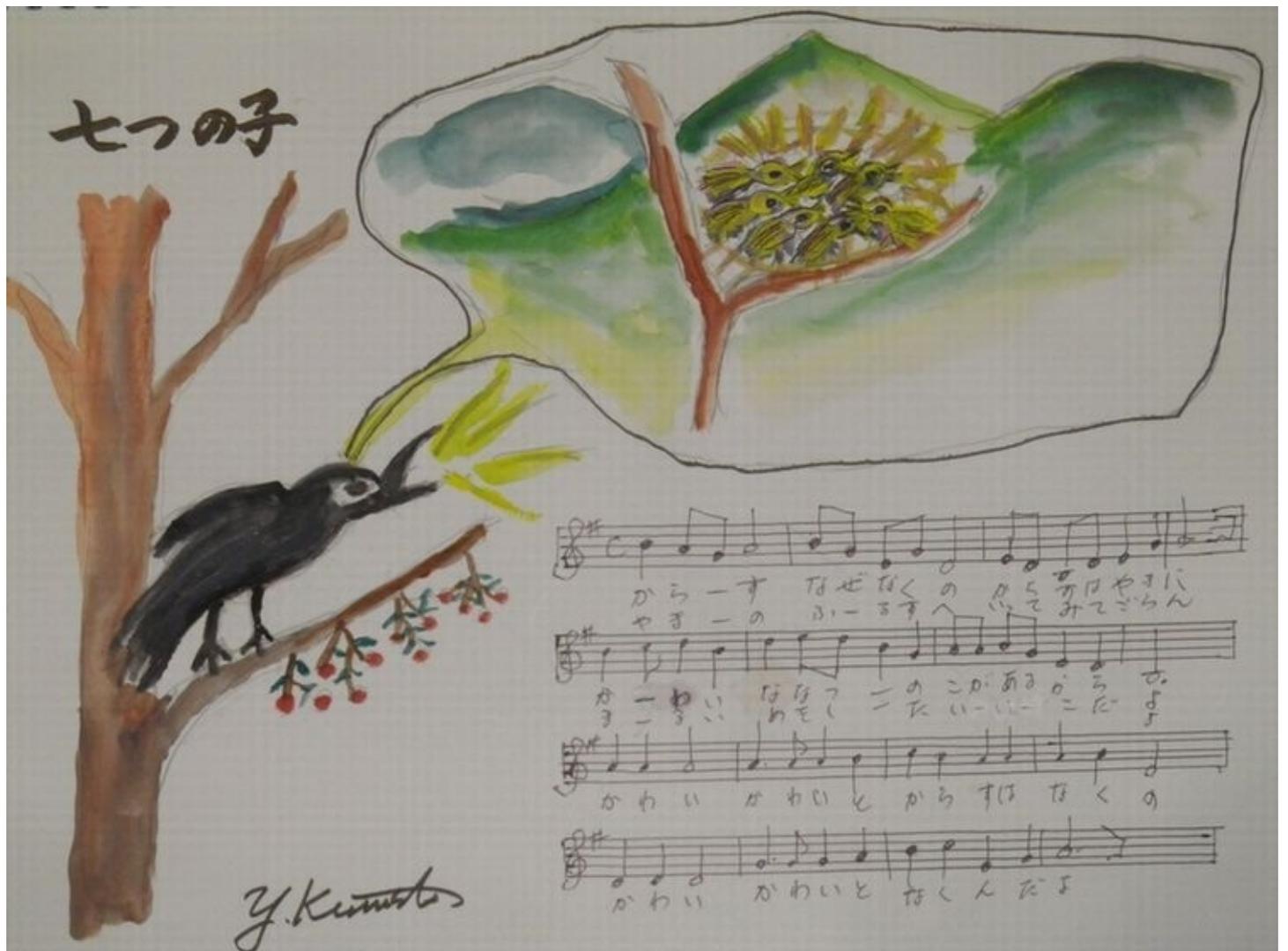
この歌は日本人なら誰でも知っている有名で、懐かしい歌です。作曲者の草川信先生には成蹊小学校の1年生として音楽の授業で直接指導を受ける貴重な経験をしました。ご息子が応召中で間もなく戦死、ご自身も結核に侵され55歳という若さで亡くなりましたが戦前にはこの「夕焼け小焼け」「汽車ぽっぽ」、戦後も「緑のそよ風」など名曲を残しておられます。



この曲も草川信先生の作品です。初めは「兵隊さんの汽車」というタイトルで出征兵士を送る歌でしたが戦後現在の形に変更されました。



日本では珍しい砂漠をゆくラクダの歌、新婚時代、妻の嫁入り道具の中の蛍光灯スタンドに、なぜかオルゴールで「月の砂漠」が入っていました。当時の貧しい暮らしの中では、非常にロマンティックで印象的な曲でした。



この曲も大変有名な歌ですが、ふつうは嫌われ者のカラスが、子供に対する愛情を表現するところがユニークです。野口雨情らしい愛情あふれる作詞。ただ、山にいる7つの子に呼びかけるシーンをどう表現するか、苦心の作品となりました。



菜の花畑に入日薄れで始まるこの歌は「詩」そのものといってよく、このような絵になりました。





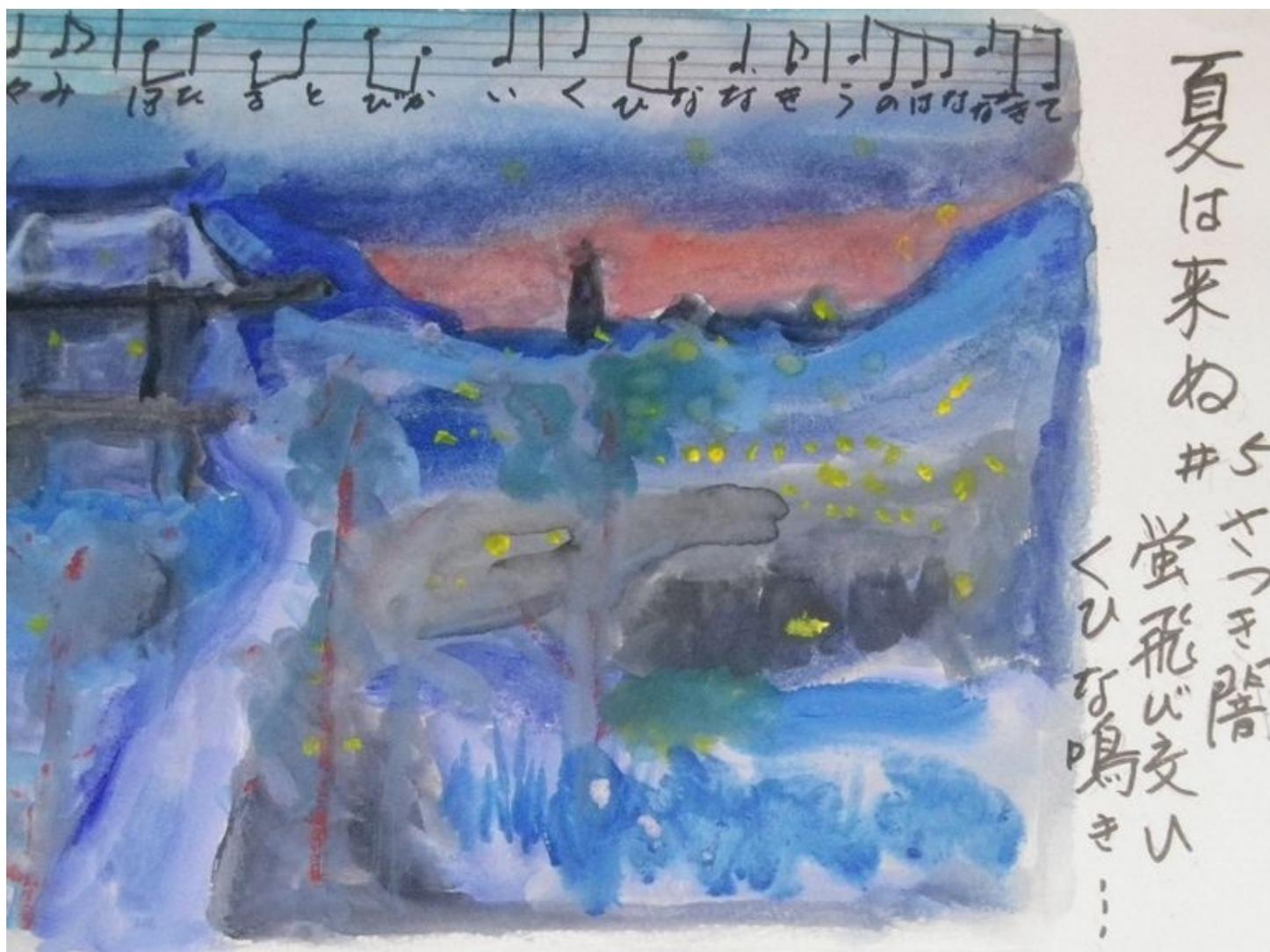
「菜の花畑に入日薄れ」で始まるこの歌は「詩」そのものといってよく、このような絵になりました。





「夏は来ぬ」は、私の知る限り1番から5番まであり、その一番は「卯の花のにおう垣根にホトトギスはやも来、鳴きて」とありますが、まず、卯の花のにおう垣根のイメージで悩み、ホトトギスは鳴き声は東京特許許可局などともじられる面白いけたたましい鳴き声はおなじみですが、姿はなかなか現さず、しかも地味なのでまた一苦勞、垣根の上の木立の中に鳥らしい姿がお分かりいただけますか。





夏は来ぬで印象的なのがこの5番「さつき闇螢飛び交い、水鶏（くいな）鳴き...」と続く。螢を描くのはまあ、よいとして水鶏（くいな）など見たこともない。昔の日本には一般的で昔の文献にはよく登場するらしい。私も徒然草で読んだ記憶があった。なかなか難しい画材でした。



「奥の細道」で山形県の山寺に立ち寄った芭蕉が、ジューッと鳴く蝉の声が静かさの中で岩にしみいるような情景を詠んだものとされています。が、ある外国人の友人は「蝉とはうるさいもの、それが静かさと結びつくとは考えられないし、まして、岩にしみいるというのはどういう意味か理解ができない」と言っていました。日本人の感性では十分に理解できますが、理解できるのは日本人だけでしょうか？

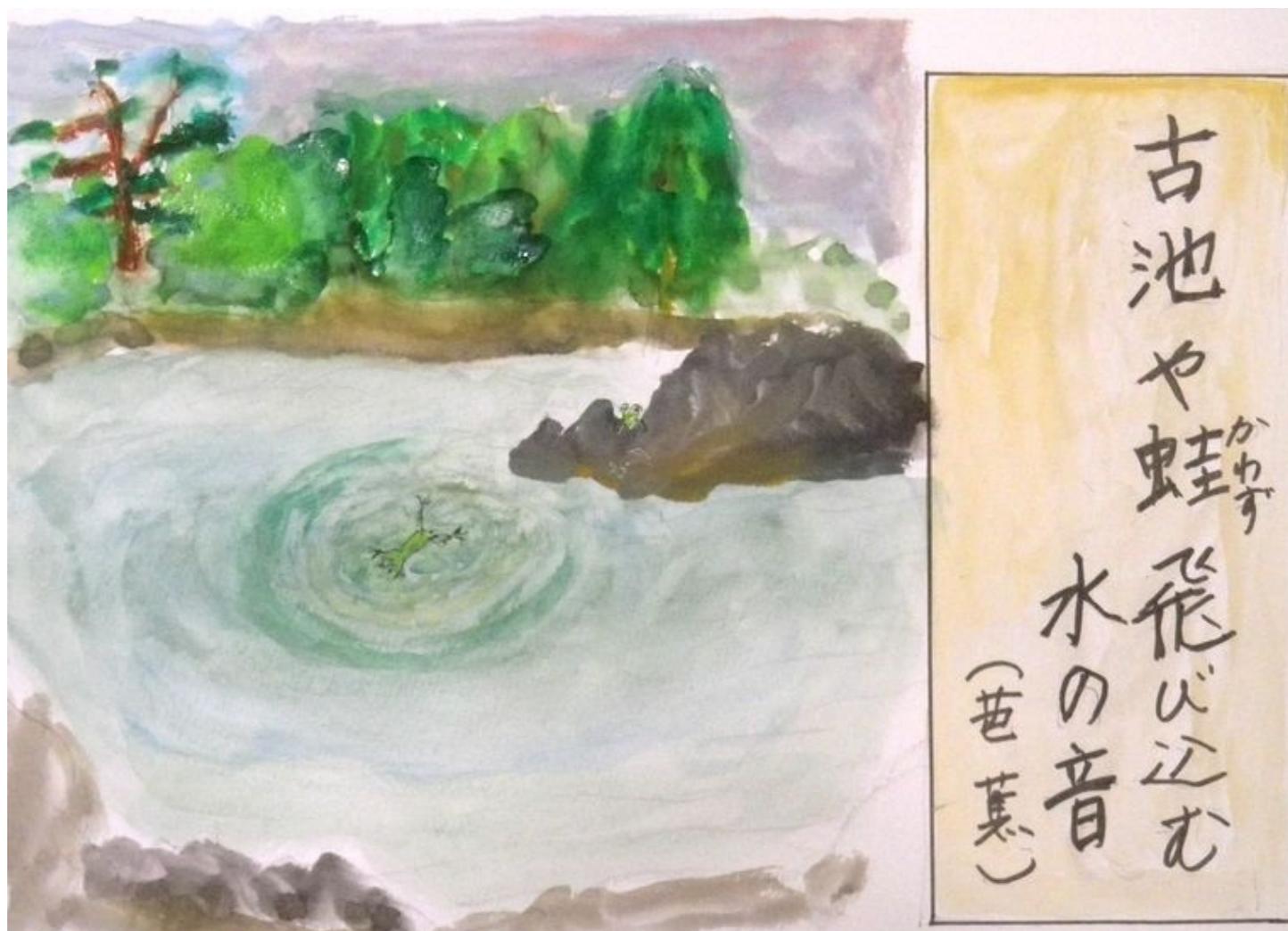


夏草や兵（つわもの）どもが夢のあと（芭蕉）

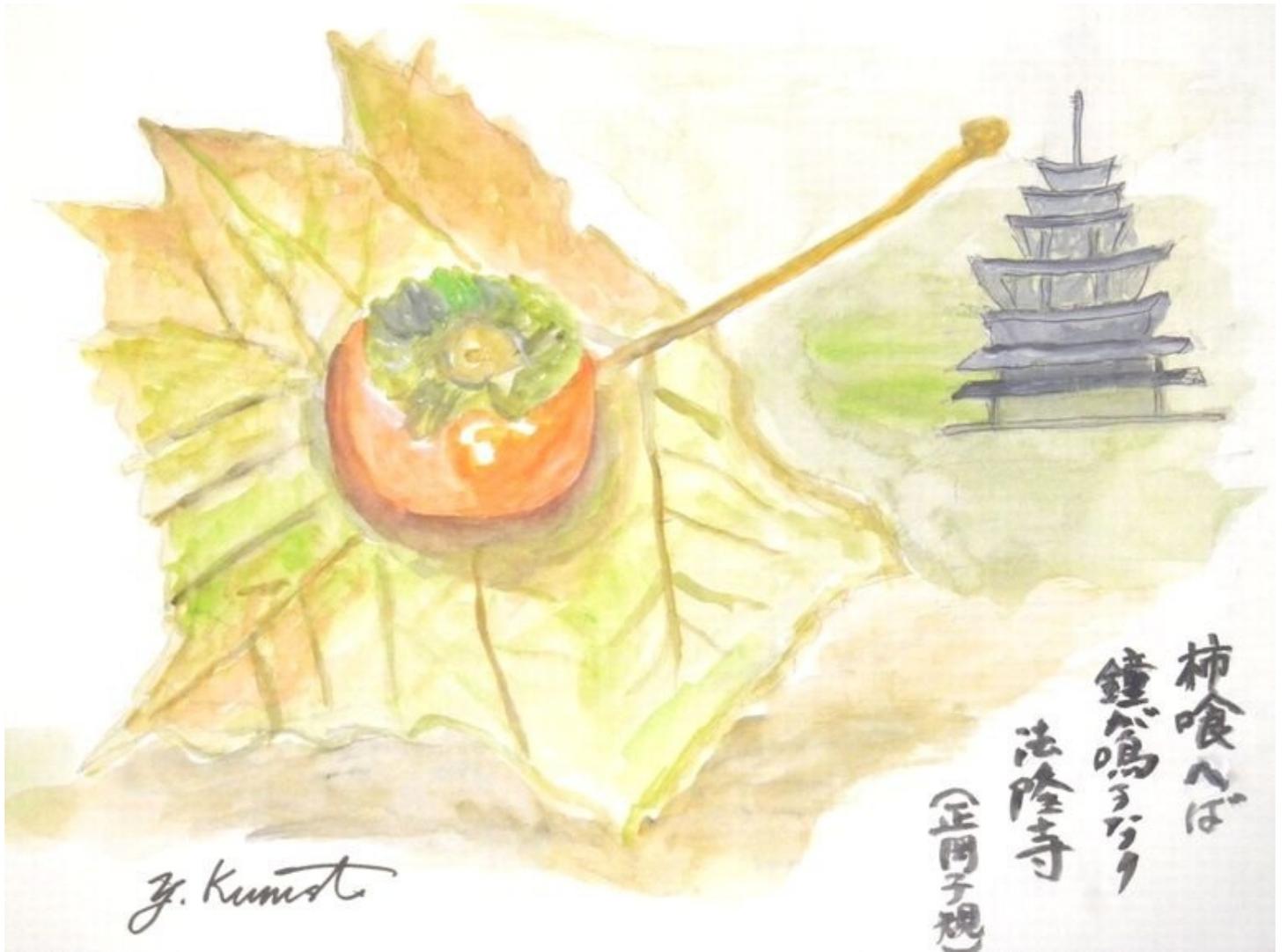
芭蕉が中尊寺・毛越寺（世界遺産）を訪問した時の句である。源氏に滅ぼされた奥州藤原氏の菩提寺で往時をしのいで詠んだ句と言われている。絵は、毛越寺の仏像（右上）と寺院（右下）と庭園（左）



芭蕉が晩年大阪で病氣療養中に詠んだ句で「床にふせっていると隣の様子が気になる」という意味だと言われています。どこにでもある路地の一角の風景です。



芭蕉のあまりにも有名な俳句ですが、カエルが飛びこんで水の音がする—という意味で、どう表現するか随分迷いました。インターネットで検索しても参考になりそうな画像がなく、全くのオリジナル画像です。一匹が飛び込んで仲間のもう一匹が岩の上で見ている—という構図ですが如何でしょうか？



正岡子規の代表的な俳句だが、実際の情景を詠んだものではなく、フィクションの世界だという人もいます。この絵は、絵画教室の課題で描いた柿の絵に五重の塔を加えて、子規の句を連想し描いたものです。

## われは海の子

この歌は、海洋民族の日本人にぴったりの歌です。「われは海の子白波のさわぐ磯辺の松原に煙たなびく苫屋（とまやといっても、いまの人はわからないでしょうがわらぶきの小さな小屋のこと）こそわがなつかしき住処なれ。」「生まれて潮に湯浴みして波を子守の歌と聞き一静岡県焼津の石原水産は、漁師の子供として生まれた創業者の石原忠一氏が一代で築いた地元の水産会社、奥さんの操さんも漁師の娘さんだったそうです。拙著「鰹で築く痛快一代記」（水産タイムス社刊）参照。



# 埴生の宿

課題で描いた作品ですが、なんとなく「埴生の宿」というイメージだったので、表紙にも使いました。



# もみじ

まさに全山もみじ「山のふもとには裾模様」です。アクリル描いたせいか色が一層鮮やかです。

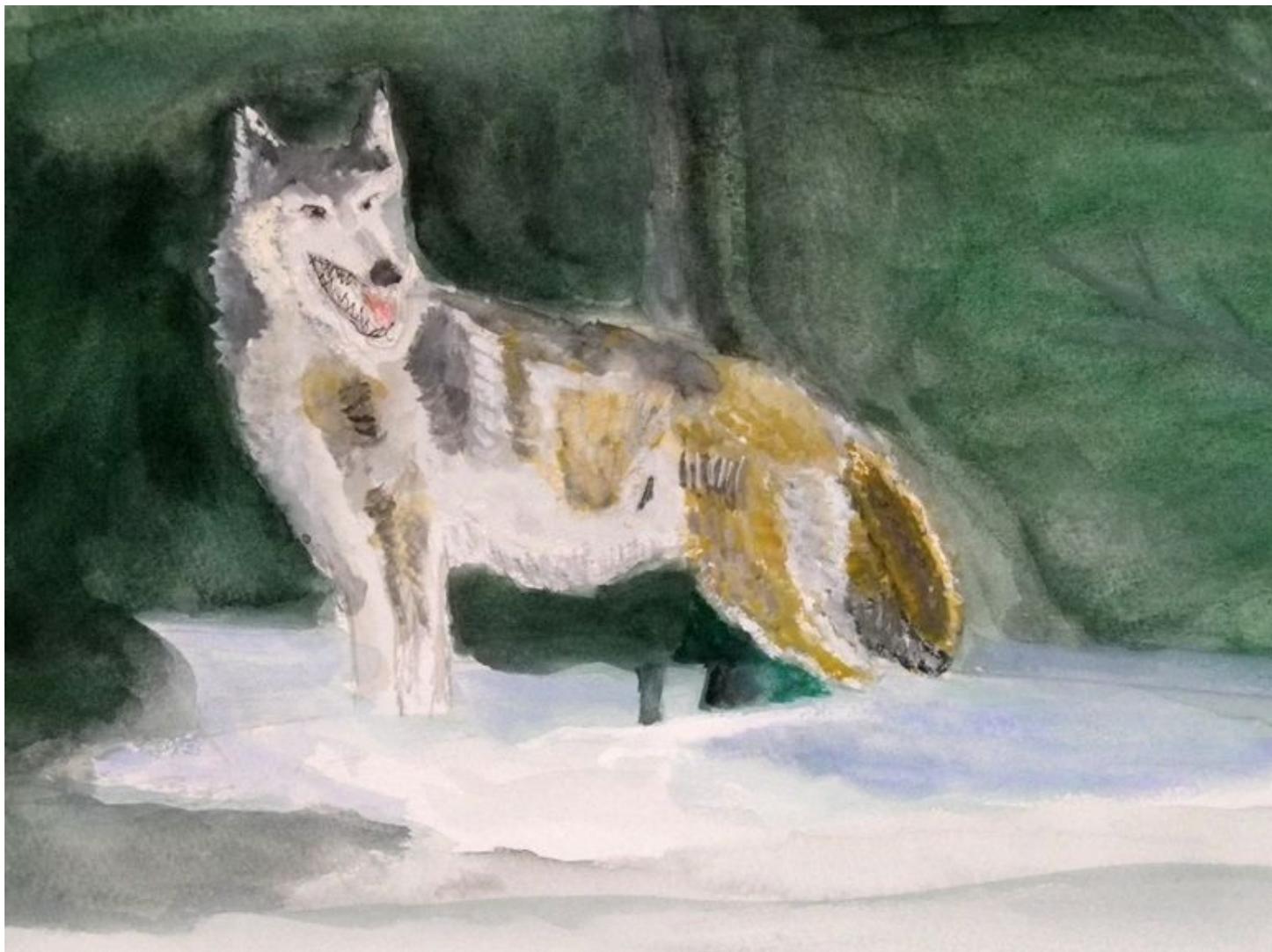


「雪やこんこ、あられやこんこ」おなじみの童謡、2番の「犬は喜び庭駆け回り、猫は炬燵で丸くなる」に焦点を合わせましたが、庭駆け回る犬はどうか、描けても猫が炬燵で丸くなる、は小さすぎてよく、わかりませんね。子供たちは雪だるまに雪合戦、これは70年前の私たちの姿です。





内村直也作詞、中田喜直作曲で高英男の歌で有名。NHKみんなの歌で発表されたそうです。雪の降る情景は  
難しくないのですが、ふるまちというところが大変難しくこの絵のようになりました。



写真を教材にして描いたもの、割と精悍に描けたので、オオカミのようにも見えますね。

豹？チータ？

---

犬と同じように写真から、イリオモテヤマネコ？ツシマヤマネコ？あるはチータ？



## シャガール 1 空中ブランコ乗りと曲芸師



シャガール 1 空中ブランコ乗りと曲芸師 (NHK文化センター宇都宮教室課題)

画家には珍しく？一人の妻を生涯愛したシャガールはサーカスが好きだったといわれ、たくさんのサーカスの作品を遺している。

シャガール 2 花瓶の花と恋人たちより

---



シャガール 2 花瓶の花と恋人たちより(NHK文化センター宇都宮教室課題)

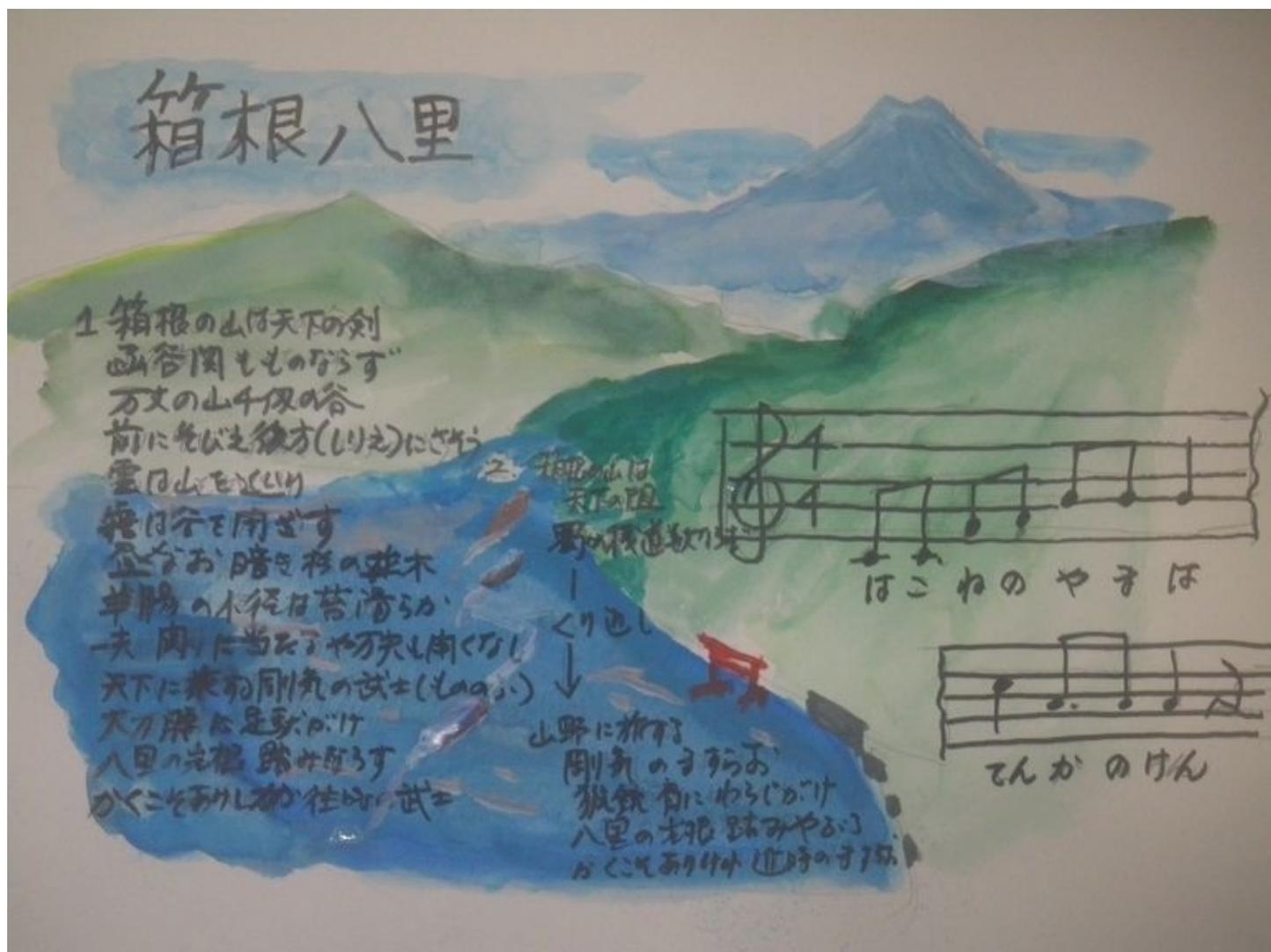


土井晩翠作詞、滝廉太郎の名曲として知られています。大分県竹田城で詠まれたとされていて現在は南米マチュピチュを彷彿とさせる「天空の城」として注目されています。絵も、そのイメージを描こうかと思いましたが、少しイメージが現しにくいので、この形になりました。

大分県竹田城（「天空の城」）は次項にUPしました。

荒城の月(竹田城、天空の城)





滝廉太郎の「箱根八里」は、「箱根の山は天下の剣」で始まる歌で有名です。「函谷関もものならず」「羊腸の小径」までは何とかわかるとしても、2番の「蜀の栈道まならず」はどんな意味が知りませんでした。

中国四川省の険しい道を指しているそうです。



風光明媚な琵琶湖、旧制第3高等学校（現在の京都大学）のボート部の学生だった人が作詞作曲した歌で約90年後の今も広く親しまれています。5番までありますが、よく読むと、2番で少女の失恋、4番で竹生島に祭られている少女の魂、とあり伝説の悲恋を歌ったものとうことがわかります。そして6番で汚れた現世を離れて熱き心で漕ぎ出せ、と当時の青年の心意気が感じられます。



この歌は柳田國男が学生時代、伊良湖に長期滞在（病氣療養？）した時、ふと目にした浜辺のヤシの実の話を友人の島崎藤村にしたら、それをさっそく詩にして発表したもの。ドイツの漂白の詩人の歌を下敷きに念頭には中国唐の詩聖李白があった、とされています。（芭蕉も李白にあこがれて旅に出て「奥の細道」を書いたことが文頭に記されている）

童謡・唱歌・俳句の画集

<http://p.booklog.jp/book/93175>

著者：くにし・よしひこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ykunishi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/93175>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/93175>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ